9.　2000 年前　中国から日本へ持ち込まれた中国製鉄斧

約 2000 年前　弥生時代
高度な表面脱炭処理　鉄の強靭化熱処理伝来のルーツか ？

古代 7 世紀　丹後遠所製鉄遺跡での「高チタン砂鉄によるたたら」製鉄は現在の溶接材料に通じる技。びっくりしましたが、先日　姫路兵庫県歴史民俗博物館での村上泰樹氏「兵庫の鉄」講演の中で起源前の弥生遺跡から発見される中国大陸伝来の鋳物製鉄斧では　表面をネバクするため脱炭の熱処理が施されている事知りました.　（例えば　福岡県比恵遺跡鉄斧など）
また、低温加熱して鍛錬することで不純物や炭素を飛ばし、強靭化する技術（錬鉄）も既に紀元前にあったという。
後年の日本刀に見られる鍛錬技術や硬い鉄とねばい鉄のハイブリッド化技術のルーツがここにも見える。これらの技術も古代から連綿と現在に続く『鉄の技』・『先人の知恵』

高度な熱処理による脱炭表面処理がなされた中国製の古代　鋳造鉄斧

石器時代　黒曜石などガラス質で鋭利な癖開面を出す事が出来る小型の剥離石器の発明が人間の移動を可能にし、アフリカで生まれた人類大発展の起爆（特にシベリア・日本への移動。原日本人の形勢）の一つとなったといわれる。
鉄器についても一口に『日本　鉄器伝来』といわれるが、その鉄器とともに付帯するさまざまな技術が持ち込まれ、鉄器の使用のみならず、社会・文化変革の技術を提供し、更なる発展と日本形成に大きな役割を果たしていったといえる。
　上記の弥生時代の中国製鉄斧にも、人類繁栄を作った近代鉄加工技術のルーツの一つが見える。

2001.1.28. by M.Nakanishi